

I. 中世英文学談話会を語る

1. 最初の一年 都留 久夫（横浜国立大学名誉教授）

あの頃は本当に若かった。もう 30 年も前の話だ。繁尾さんから中世英文学の勉強会のよ
うなものを作ろうと相談を受けたのは 1954（昭 29）年の秋だから。12 月 17 日（金）午後
一時から明治学院の薄暗い研究室でその最初の会合を持った。出席者は齋藤国治先生（元
明治学院大学教授）、土居敏雄先生（現豊橋技大教授・ケルト語専攻）そして繁尾、都留の
4 人だった。すっかり忘れてしまっていたが手元に残っている記録をひっぱり出して見ると、
会の性格、事業、会員の資格、会の名称、会費、役員のことなど一応ちゃんと話しあって
決めているのだ。会の発足当時からすでに各大学の中世英文学の研究者に呼びかけて、皆
を集めた会にすることを考えていたことがわかる。そしてこの会合が、いわば発会式みた
いなもので、この時決定したことが、それからの談話会の方向を結局決定づけたのであっ
た。この時集った 4 人の中で僕が一番齢下であったから、全く当然のように僕が会の事務
をとることになったので、最初の一年間の記録が手元に残っているのだ。

この時決定したことは会名を「初期英文学研究会」とし、OE・ME の語学、文学に興味
を持つ者を会員とし、毎月一回談話会を開催、一回一名が発表する。会費は例会ごとに 50
円徴集し、茶菓代、通信費にあてる。幹事は最初は都留とし、例会案内・記録・会計等を
扱うなどであった。

こうやって発足した研究会は翌 55（昭 30）年 1 月 22 日に第一回談話会を持つことにな
ったが、その席で会名を正式に「中世英文学談話会」とすることにした。発表は繁尾さん
の「アングロ・サクソン文学の展望」で、H.M. Chadwick についての詳細な報告だった。そ
の頃繁尾さんは OE 文学に取り組んでいたのだ。出席者は小林栄智、齋藤国治、土居敏雄の諸
先生と寺澤、繁尾、都留の 6 人であった。

最初の一年間に 10 回会合を持ったが次の通りである。第 1 回 55 年 1 月、発表者繁尾「OE
文学の展望」出席 6 人、2 回同年 3 月齋藤「ME 文学の背景」7 人、3 回 4 月都留「Chaucer:
the Book of the Duchess」5 人、4 回 5 月寺澤「中世英国における聖書の翻訳」7 人、5 回 6 月
土居「意味変化の音韻変化に与えた影響」8 人、6 回 9 月繁尾「OE の Elegy の研究」9 人、
10 月高橋源次「Towneley Play について」14 人、8 回 11 月都留「Chaucer の Shorter Poems
について」13 人、9 回 12 月野村悦子「OE における Relative Pronoun」11 人、そして第 10 回
目は翌 56 年 1 月伊東只正「ME Vocabulary における foreign elements」出席者 13 人であつた。
はじめ明治学院と ICU でスタートした「談話会」は 4 回目から東京女子大の人達加わり、
第 7 回目から慶応の池上忠弘さん、YWCA の小出啓子さんなどが加わって、少しずつ多彩
な顔ぶれが集まるようになっていった。

発表者は大変で、とにかく制限時間がないのだから一人がたつぷりと 2 時間ぐらい話を
し、その後の質議や討論は話しが切れるまでえんえんと続いた。まだ皆若かったので、お

互いに自分で読んだ作品数などもたかが知れていたもので、他の人達の発表が本当に為になった。発表者にとっても、いろいろな方面からの質問や意見が出されるので大変だったが、とても役に立ったものだ。こうやって会員たちは大学や専門の壁を乗り越えた、現在まで続く親交を得るようになっていたのであった。

第 10 回の例会は設立後一周年になるので、伊東さんの発表を中心とした談話会のあと、目黒にゆき、夕食をとりながら総会を開いた。この時から、総会を年一回持つことになり、幹事を一年交代とし、次は慶応の池上さんと、会計に東京女子の野村さんの二名ときまり、僕はやっと役を降りることになったのである。また「ニュース」を発行したいということになり、会費を年会費 100 円、例会費は 50 円（学生 20 円）ということにしたが、「ニュース」の発行はだいぶ後まで実現できなかった。幹事は 3 年目は教育大の中尾俊夫さんがなっているのだから考えてみると繁尾さんの名前が出て来ない。繁尾さんはこの会を考え、つくられたのであり、実質的には、発会当初から暗黙のうちにこの会の代表者であり、会長さんだったのである。

「談話会」ではその発足から、OE と ME をきりはなしてはならない。また語学と文学をわけてはいけないということが根本にあった。外国文学であるから、むろん語学をぬきにしては文学はできないし、文学を軽んじて語学の研究をすることもできないと皆強く感じていた。しかし実際には文学をやるものには語学研究はわからず、語学だけをやっても文学は理解できるものではない。Oxford の philological approach に対し、Cambridge の文学者たちが物足りなく思ったのもその点であった。日本の中世英文学の先達者たち、市河三喜、西脇順三郎、厨川文夫、小林淳夫、上野直蔵といった方々は皆、語学と文学の両方を指向することを心掛けていた。生地竹郎なども亡くなられるまで「英語史」を大学で講じていたことを考えると、私たち「談話会」で何とかその両方の話が聞けるように運営することができたのは、やはり日本の中世英文学研究の伝統によるものだったと思う。

しかし「談話会」もすっかり大きくなり、専門分野も細分化し、研究も深化して来て、他の分野の発表に耳を傾ける余裕がだんだんなくなってきてしまった。残念なことだが、やはり談話会は終わりをつけ、新しい学会にかわる時が来たように思う。繁尾さんの手でつくられ、そして繁尾さんの代にこの会が解散するのも、そういった宿命だったのだ。

[付記：「中世英文学談話会会報」22 号（1984）より転載；都留久夫先生は川村学園女子大学教授在職中の 2001 年 1 月 12 日ご逝去、享年 74 歳；日本中世英語英文学会小史編纂委員会]